



あの先生になら、叱られたい

「あの先生になら、叱られたい。」

私の初任校で、ある女子生徒が発した言葉です。彼女の周りには生活指導上課題を有する生徒が数名おりましたが、皆うなずいていたのが強く印象に残っています。

当時私の所属校は、対教師暴力等がある、いわゆる生活指導困難校でした。当該の若手教師は、廊下に座り込む生徒たちに自ら寄って声をかけ、時にじっくり話を聞いていました。しかし決して「甘い教師」ではなく、改善すべきは的確に指摘し、正すよう指導を行っていました。

そうした折、当該教師は決して感情的にならず、長い「お説教」もしません。人前ではなく**個別に対応し、人ではなく行為に焦点を当てた指導**に徹していました。一方的に叱るのではなく、生徒の言い分を聴き、何が問題でなぜ改善が必要なのか、生徒が**理解し納得する説明**を行い、**改善策も提示**していました。



適切に「叱る」行為は、子供の成長を促し、信頼関係をより強固なものにします。
そのため私は、次に記す「怒る」と「叱る」、「諭（さと）す」の違いを認識した上で、「諭す」がごとく「叱る」のが理想であろうと考えております。

- 「怒る」は、感情を抑えきれず、不快感や不満を表出させること。
- 「叱る」は、相手の成長を願い、間違いや不適切な言動を正すこと。
- 「諭す」は、穏やかに道理を説き、相手が自ら気付くようにすること。

習慣は少年時代に決まる

実業家 渋沢栄一

少年時代の頭脳に記憶したる事は老後に至っても消失せず、明確に存在しておるものである。ゆえに習慣は少年時代が最も大切である。

出典：「渋沢栄一 一日一言 人間力を高める言葉」（致知出版社）

※ 義務教育修了までに、一つでも多くの望ましい習慣を形成したいものです。